



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 「忘れられた戦争」の負傷兵：フィリップ・ロスの『インディグネーション』における「切断」と「接続」                                    |
| Author(s)    | 近藤， 佑樹                                                                              |
| Citation     | 大阪大学英米研究. 2020, 44, p. 111-126                                                      |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/99447">https://hdl.handle.net/11094/99447</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「忘れられた戦争」の負傷兵

ーフィリップ・ロスの『インディグネーション』  
における「切断」と「接続」ー

近藤 佑樹

はじめに

『インディグネーション』(Indignation, 2008)はフィリップ・ロス(Philip Roth)による中編小説で、彼が初めて朝鮮戦争を時代設定に明示的に組みこんだ作品となる。主人公は、大学生のユダヤ系アメリカ人マーカス・メスナー(Marcus Messner)で、肉屋を営む父親との関係は良好でなく、ニュージャージー州ニューアークの実家を出てオハイオ州のワインズバーグ大学に大学2年生から転入する。しかし、ユダヤ系の出自でありながら、無神論者である彼にとって、保守的なキリスト教の大学という環境、そしてそこで全校生徒に強制されているチャペルアワーは苦痛以外の何物でもなかった。学部長に直談判し、強制参加の免除を、数学者及び無神論者としても知られたバートランド・ラッセルの引用を交えた演説めいたもので訴えるが、努力むなしくタイトル通り「憤り」に満ちた彼の言い分は聞き入れられない。さらに生活環境に不満があるとしてルームメイトとの衝突も絶えず、周りとの友人関係もほとんどなかった。学業面では極めて優秀な彼は、その他の面でシステムに憤慨し、反抗を続けていたのだが、とうとうチャペルアワーに「代席」する人間を雇っていたことが発覚し、退学を余儀なくされる。

そんな中、彼は兵役に就くことになり、朝鮮戦争の前線にてやむなく命を落とす。より良き場を目指して、必死に自らの居場所を見つけようとしたマーカスの一生は早くもその幕を閉じることになる。結局のところ、どこにも

安全で安心できる彼の居場所は少なくとも表面的にはなかったのだ。本論文の目的は、朝鮮戦争という設定を取り入れた本作の主人公であるマーカスの切り刻まれた身体が象徴するものを「切断」と「接続」というキーワードを用いて考察することで、ミクロ（個人）かつマクロ（国家や大学）のレベルにおける彼の立ち位置を確認し、本作のタイトルでもある彼の「憤り」を巡る諸相に迫っていくことだ。

### ロスの朝鮮戦争

まず、本作の背景や一連の評価を確認していく。ロス本人が本作を執筆した背景について、あるインタビューで言及している。

When I finished my last book, *Exit Ghost*, and began looking for a new book to write, I thought, "What period of history that I've lived through have I not paid attention to?" It was this period of the Korean War, which started in June 1950 and ended in 1953, and those are the years that I was myself a college student. (Mustich n.pag.)

ロスによると、1950 年から 53 年まで続いた朝鮮戦争の時代はまだ扱っていなかったということ、そして自分も当時学生だったことから、時代設定を決めて本作を執筆したという。前作の『エグジット・ゴースト』(*Exit Ghost*, 2005) は、ロスの分身とも言える主人公のザッカーマン・シリーズの最終作にあたり、執筆当時の時代を描いているという点において、今までの本シリーズの基本設定を踏襲している。ロスは次作を執筆するにあたり異なるアプローチを試みたということになる。

歴史的文脈からしても、ロスが今までこの戦争を大々的に取り上げてこなかったことは理解できる。なぜなら、端的に言えば、朝鮮戦争とは「忘れられた戦争」として認識されることが一般的で (Cumings 62)、デイヴィッド

・ハルバースタムも「ときにまるで歴史から見捨てられたかのよう」(21)な戦争であったと記述しているからだ。そして、そのような朝鮮戦争をメディアはどういった形で作品にしたか、という点に関して “These perspectives—the gritty war drama and the absurdist narrative—were the primary representations of the Korean War in popular culture, and best illustrate the war’s ambivalent legacy” (57) と、アメリカにおける朝鮮戦争の文化表象<sup>1</sup>を幅広く考察したジョナサン・メリットは指摘しているように、「不条理なナラティブ」は一種のパターンであることが伺える。

そして、本作の評価についてリタ・D・ジェイコブスは、“Yet the reader ultimately feels that this admittedly ‘good read,’ with its neurotic, libidinous, and mostly frustrated young man, belongs with Roth’s early work rather than the fierce, large-scale cultural landmarks he has more recently given us in *American Pastoral* and *The Human Stain*” (66) とまとめており、『アメリカン・パストラル』(1997) や『ヒューマン・ステイン』(2000) のような後期作よりもロスの初期作に親和性を見出している。マシュー・シャイプも、議論の出発点として、デビュー作『さよならコロンブス』(*Goodbye, Columbus*, 1959) や『ポートノイの不満』(*Portnoy’s Complaint*, 1969) など、初期作との類似を紹介している(1-2)。たしかに、短編集からデビューし、後の数年間は中編を発表することが多かったロスの執筆歴を鑑みると、この中編小説が初期作と共鳴するところがあるのは理解の出来ることだとも考えられる。しかし、関連は見いだせても、初期作と特に異なる点は最終的な主人公の悲劇的な運命と言える。

そして他者の描写の問題について考察したい。朝鮮戦争における敵とは、共産主義勢力の兵士たちであり、彼らにバックボーンを与えるようなナラティブは用意されていない。残虐な形でメスナーを葬った中国軍兵士たちの描写はまさしくそれにあたるだろう。こういった一面的な相手の描写について、冷戦史研究の大家である国際政治学者ブルース・カミングスは以下のように紹介している。

Roth's novelistic treatment of the war he lived through does not go beyond the tropes and stereotypes of the time: "swarms" of Chinese, snow, "wave after wave" of Chinese, more snow, "a thousand screaming Chinese soldiers come swarming down on you" —and it's still snowing. What was the war about? It remains a mystery. (68)

ステレオタイプの敵側が描かれており、なおかつ朝鮮戦争自体が一体どういったものであったのかは不明なままだ、というこのカミングスの指摘は簡潔ではあるが、一定の説得力を持っていると言える。

中国兵という他者表象に関して批判されうる要素をはりみながらも、不条理なイメージを伴いがちな朝鮮戦争を描くことに挑戦し、本作をロスが生み出したと言える。そこで、その悲劇的な運命を辿ることになった主人公について考える上で別の可能性を検討するために、厳密な意味での肉体性から一旦議論を始め、段階的に考察のスコープを拡大していく必要がある。

### 生死の狭間に一人体破壊を巡って

まず、本作において、マーカスの身体性が重要な要素であることを確認しておきたい。その理由は、彼のナラティブと彼の身体的状態が直接結びついているからだ。自らの過去を一人称で語るメスナーは自分が戦死し、時間が完全に止まった永遠の闇の中に囚われていると思っている。ユダヤ系の出自でありながら、信仰心を持たない彼の無神論的な認識の下、彼は「死者の視点」から、既に終わってしまった自分のライフ・ヒストリーを語り始めるのだ。しかしながらこの認識は誤りであること、つまり、彼は重症を負ってはいるものの、モルヒネの影響下でまだ生きていることが後に明らかになる。

Prior to the moment of cessation, to the moment when he was past recall and able to remember no more, the series of morphine doses had, in fact, infused

the tank of his brain like so much mnemonic fuel while successfully dulling the pain of the bayonet wounds that had all but severed one leg from his torso and hacked his intestines and genitals to bits. (225 ; underline mine)

彼はまさしく瀕死の負傷兵であり、表現を変えるならば、後に助かるとしても大きな障害を負うことになる兵士（disabled soldier）だということになる。

そんな彼がこの状態に至ったのは、戦闘中、中国兵に急襲され、自らの身を切り刻まれることになったからだ。爆撃に遭う訳でも、銃撃される訳でもないというディテールは本作において大きな意味を持っている。切り刻まれ血まみれになってしまう彼の身体性に関して、例えば、マギー・マッキンリーは血の描写が本作における「儀式性」について考察する上で重要なモチーフであるとの主張をしている（187）。グロテスクにも思える描写は、単に戦争の残酷さを活写し、ショックを読み手に与えるだけではないということがまず言える。

そこで注目すべきはそういった描写がどう互いに関係しあっているのか、という点だが、ジェイムス・デュバンが “From the early pages, the kosher butcher shop is as bloody as can be, underscoring the fear of violence, and by extension, of the Korean War that permeates the novel and propels Messner to stay in college”（66）と指摘するように、肉屋での食肉解体と戦場での人体破壊、つまりこの二つの現象は両者とも “butchering” として結び付けられる。

遠く離れた二つの事象が本作では結びついており、むしろ両者は不可分な関係になっている。この議論から敷衍するならば、この暴力性を帯びた悲劇は家族全体を巻き込むこととなるということも連想できるだろう。実際にマーカスの訃報を聞いた彼の両親は、彼の喪失から最後まで立ち直ることが決してできなかった。“The mother was strong and lived on to be almost a hundred, though her life too was ruined”（229）と、母親にとってのダメージもかなり大きかったが、父親の場合はさらに深刻だった。“Our boy is gone. I was right, Marcus, I saw it coming—and now you’re gone forever! I cannot

bear it. I will never survive it.' And he didn't." (228) と、彼は肉屋でも笑顔を見せることが完全になくなり、息子の死をついに乗り越えることができなかった。

"One day Mr. Messner was paying so little attention to what he was doing that his knife slipped on a bone and the tip of it entered his abdomen and there was a gush of blood and stitches were required" (228) と、さらに彼は仕事中のナイフによる事故で大けがをして、その後失意のまま一年半あまりで息子の後を追うことになる。彼は、解体され死んでいった息子のごとく、"butcher" されていった、つまり「自己解体」してしまったと考えられる。二人とも自分に刻み込まれた "butcher" としての特性から自発的に免れるようなことは不可能だったのだ。その人体破壊のベクトルはブーメランのごとく最終的に父親に舞い戻るのだ。

朝鮮戦争の本質を説明するにあたって、ハルバースタムは "Die for a Tie" (勝利のためではなく、兵士は引き分けのために死ぬ) という「膠着状態を表す自嘲的なフレーズ」(25) を紹介している。そして、まさしくその引き分けのために、当初から朝鮮戦争に決して賛同していなかったマーカスは命を落とすことになる。アメリカ合衆国は戦争に負けずとも、アメリカ人の彼は闘いに負けるが、その彼の敗戦に伴い、負の継承が行われてしまったことになる。ここで厳密な意味での身体性から少し視点を変えて、彼の死に対する多角的な理解を得るため、本人の周辺で展開していた事象を見ていく。

### 心病める女性から戦死する男性へ「切斷」と「接続」

実はマーカスの肉体の破壊の前に、恋人オリヴィアのメンタルヘルスの問題があった。そしてここにその二つの出来事に通底するものとして「切斷」のモチーフが立ち現れてくる。最後に二人が出会うのは虫垂炎を患い手術をしたマーカスの入院先の病室である。彼の盲腸は切斷され、取り除かれる(124) のだが、そんな彼の元を最初に訪れたのはオリヴィアである。彼女

は、自殺未遂した過去を持っており、完全に彼女の精神状態が良好であるという保証はなかった。しかし、彼から彼女の状態をとりわけ気に掛けるような言動は特に見られず、自分の問題ばかりに執着する。以前、初めてのデートにおけるオーラルセックスの後、彼は彼女の大胆さやその性的な意味合いに対して一人よがりにも理解に苦しんでいた。そして、またもや病室で彼は射精してしまうのだが、その後始末を涼しい顔で行った彼女の態度に対して再び無思慮な発言をしてしまう。その結果、来訪の時間はオリヴィアに対する理解が至らぬまま苦い形で終わる。

マーカスは、肉屋での解体作業からのある程度のインターバルを置いて、盲腸の手術というフィジカルな切断行為に至り、彼とオリヴィアとの人間関係の途絶えを経験し、そして彼女の精神崩壊を知ることとなる。最終的に彼女は精神病院に戻っていき、一般社会—少なくともマーカス—との関係性が一旦「切断」されることになる。実際のところ、この「切断」(sever)という単語が、肉屋の “If he [Marcus's father] . . . severs the trachea, the esophagus, and the carotids, and doesn't touch the backbone, the animal dies instantly and is kosher” (160) という描写、オリヴィアの後に彼の元を尋ねた母親の “You must sever the relationship with her [Olivia]” (173) という一方的な助言、そして先述した “the bayonet wounds that had all but severed one leg from his torso” (225) という切断された彼の脚の描写など、本文中の要所に埋め込まれていることが確認できる。

身体面でも精神面でも “sever” という単語がつながっていくさまは逆説的にも「切断」的事象が「接続」し、一種の連鎖反応を生んでいることの証左となりうる。父親も自らの身体を刃物で刺してしまうという現象もこの連鎖の一部だと言える。さらにそれらの負の記憶は、様々な経験として彼の心身にため込まれていくという見方もできるならば、後の彼の生々しい身体破壊の描写を読み込むことが可能となるのではないか。

そしてオリヴィアについてさらに一考するなら、以下の引用にあるように彼女は望まざる妊娠をしてしまったという出来事が学生部長、マーカス、そ



して当然ながら本人に重くのしかかり、比較的平穏だった学生生活も続けられなくなった、ということも重要だろう。

“I told you,” he [the Dean] said, “the girl had a breakdown. No, she is not all right. Olivia is pregnant. Despite her history, someone went ahead and impregnated her” (191)

“A helpless young woman, a deeply unhappy person suffering from long-standing mental and emotional problems, unable adequately to protect herself against the pitfalls of a young woman’s life, has been taken advantage of by someone. By someone with a lot of explaining to do” (192)

つまり、対照的に思えるオリヴィアとマーカスを比較する際に、前者は望まざる妊娠、という内なるものを抱えてしまい精神的な「内破」を迎えてしまう一方で、後者は内臓が外の力により強引にも掻き出されており、自らの身体を外へと放出することになる、という構図を見いだせる。ここに、彼の内臓 (intestines) がまさしくためこんだものを放出したと言えるだろう。また内臓や手足だけでなく、性器をも切り刻まれている点に関しては、オリヴィアとのセクシュアルな関わりを持った過去と接点を見いだせるのではないか。マーカスの最期こそ孤独なものであったかもしれないが、彼の死は象徴的に見れば孤立していなかったし、むしろ決して美化できない出来事や人間関係といった様々な要素が想定外にも過去の亡霊のごとく彼に憑依していたともいえよう。

### 障害を抱えた兵士—Extraordinary の不可能性

今までの議論では死にゆく存在としてのマーカスに着目してきたが、彼の死は実際のところ最後の十数ページまで訪れない。そこで、後に生き延びる

ことが出来るかもしれない、身体的障害を抱えた存在としての彼の身体性について検証しておく。

ローズマリー・ガーランド・トムソンは、文学における障害表象において議論する際、単に障害を持っているか否かという“disabled/abled”の二項対立から脱却すべく、“extraordinary body”という表現を用いて小説内の登場人物たちを分析している(137)。トムソンは、障害を持つ者が“extraordinary body”を持つ人物として描かれている一例として、トニ・モリソン作品における黒人女性たちを挙げている。このことが示しているように、黒人、そして女性という点で二重にマイノリティである人物が、障害を負うことでさらに周縁化されうる状況だからこそ、そこに一種の逆転現象が物語内で生じている、と言う見方がある。

彼女の表現を援用すれば、マークスは大けがを負い、両腕、片足、そして性器をも失い、“disable”な状態にありながらも、“extraordinary”でも、“in-ordinary”でもない、朝鮮戦争における“ordinary”な死を迎える。換言すれば、彼が実際にその場を生き延びていれば、彼は相当に“disabled”でありながらも、“extraordinary”な身体を持つ、ということもあり得たかもしれない。しかし、その機会は決して訪れることはなかった。逆境の状況から生を祝福し、力強く生きる、というチャンスは生きているからこそ到来するものであるが、その土俵にすら彼は立てなかったということになる。

ここで、議論の補助線としてロスの他作品における身体的な障害を持つこととなる人物たちの例を参照すべきだろう。ロスの最終作『ネメシス』(*Nemesis*, 2010)では、主人公がポリオウイルスに感染し、車いす生活を余儀なくされることになる。今や健常者でなくなった彼は、残りの人生も意気消沈したまま送ることになる。彼の生活様式は、幼年時代彼に憧れていた語り手のそれとは対照的なもので、いかに主人公が自らの「障害者」としての枠組みから脱却する契機を欠いていることが浮き彫りになっている<sup>2</sup>。また、歴史改変小説『プロット・アゲインスト・アメリカ』(*The Plot Against America*, 2005)では、主人公のおいが、ヨーロッパのユダヤ人同胞を救う

ために従軍するものの、片足を失った負傷兵として帰還する。彼の場合も、義足生活に慣れず苦勞し、自らの逆境をプラスにすることの困難さが描かれる。のちに彼は成功を収めたギャングのような風貌で主人公たちの目の前に現れることとなるのだが、主人公の父親と喧嘩になる。その際、完全に損壊する彼の義足が物語るように、親族の中でも平和な関係性を築けなかった彼の姿がうかがえる。このように、身体面でハンディキャップを負った者たちの迎える展開は決して盤石なものではない。そのような展開において、マーカスとの共通点はあるかもしれないが、この比較から明らかになるのは、障害を負ってからの「その後の人生」が前述の二者に確かにあり、だからこそ彼らの末路が分かるということなのだ。死んでいたつもりが生きていたものの、まもなくその命が尽きる、という生と死という状態を何度も行き来することで、マーカスは今までのロス作品におけるパターンにも該当しない、健常者・障害者のどちらにもなれなかった人物であることが分かる。

そして、そもそもマーカスはトムソンが指摘するような、人種的にも性別的にも自分が思っていたほどの明白なマイノリティではない、ということを確認せざるをえない。この限りにおいて、マーカスは一人の若き白人男性、というマジョリティ側の人間として還元され、逆転の契機は訪れない、というアイロニカルな状況が浮かび上がる。もちろん自身の大学では、ユダヤ人として差別も経験しており、肌の色やジェンダーといった外見で判断されうる要素を欠いた彼のマイノリティ性は十分ではなかったのかもしれない。

ブレット・アシュレー・キャプランの議論を援用するならば、ロスの作品の登場人物には「白人」的振る舞いをする加害者の側面も、「マイノリティとしてのユダヤ系」的振る舞いをする被害者の側面も登場しており、また両者の境界線は極めて曖昧になりえる (1-11)。それを敷衍すれば、自分がマイノリティ側の人間だと信じていても、それは決して不動のものたりえないのだ<sup>3</sup>。ワインズバーグ大学のハンサムなクラスメイトと自分との外見を比べて、“monstrosity of ordinariness” (38) を彼は強く感じるという場面があ

ったが、それはある種予見的な感覚であったともいえよう。

換言すれば、彼の死はアメリカの現代戦争が生み出した犠牲のごく一部にしかすぎず、冒頭に述べたように彼はパーソナルで他人には理解してもらえない問題を抱えていたにも関わらず、あえて特筆すべき存在ではなかったことになる。たしかにマイノリティは周縁化される存在だが、彼が戦場で無念の死を遂げたことは、少なくとも朝鮮戦争における歩兵たちという枠組みの中で「平等」にもたらされたものだ。彼を襲った中国兵の外見の描写が希薄だったことを指摘したが、それは中国兵をマーカスたちがどう認識していたかは分からなかったことを物語っている。また彼らにとって、マーカスのようなアメリカ兵は、その個人的なバックグラウンドは捨象され、記号化された一アメリカの兵士でしかなかったと考えざるをえない。敵側がステレオタイプに還元されていたかもしれない一方で、一種の“ordinary”な記号と化したのはマーカスの末路でもあったのだろう。記号化された、一人の顔なき兵士として彼は肉弾戦の中で、同じ顔なき兵士により、命なき肉塊と化することになる。顔なき兵士同士として、アメリカ兵も中国兵も戦場の肉塊と化してしまいうるのである。それぞれに多種多様な特徴を備えもっているはずの人間の身体性が極めて即物的な対象に還元されてしまうようなこの次元<sup>4</sup>において、マーカスのアイデンティティの本質をマイノリティ的な属性に求めるような行為はもはや無効化されてしまう。彼のユダヤ系でありながら無神論者であること、生きる環境を変えても自分に合う居場所が見つけられなかった人間であったという彼の葛藤は戦争という国家規模のプロジェクトにより一掃される。そこには戦場という不毛な世界があるのみのなだ。

### ワインズバーグの「それから」

カミングスは、朝鮮戦争とは「忘れられた戦争」であると同時に、“a never-known war” (63)、「一度も知られてすらいなかった戦争」でもあったと主張している。その一方、ジョナサン・メリットは、論文のタイトルに

“The Remembered War” と逆説的に思えるような呼称を用いている。後に小説や映像作品などで一般大衆にいかにして朝鮮戦争のイメージが形成されたかをメリットは考察しているため、このような呼称が使われている。こうした一見相反する名づけをめぐる議論は、一般社会による実際の歴史に対する記憶の欠如が問題であるという事実を浮き彫りにするといえる。本論の表現を用いれば、過去と現在は切断された状態にあるのだ。ワインズバーグの場合、どういった記憶が残されていたのだろうか。

本小説の最後の 2 ページは、Historical Notes と付されたセクションで、そこには後にワインズバーグ大学に起こったことに関して短い記述が残されている。それによると、

[T]he chapel requirement was abolished along with virtually all the strictures and parietal rules regulating student conduct that had been in force there for more than a hundred years and that were implemented so faithfully during the tradition-preserving tenure of President Lentz and Dean Caudwell. (233)

とあり、1971 年にはマーカスを苦しめた制度が廃止になったとある。そこに、彼の講演の持つ歴史的意義に触れる記述は一語たりとも見当たらない。また、彼の憤り (indignation) は不発に終わり、彼が無念の死を遂げた事実はキャンパスの記憶に残存していない。朝鮮戦争にて命を落としたのは同学年で彼一人だったという極めて際立つ事実も－むしろ犠牲者は彼一人だったからこそ学生たちの記憶から抜け落ちてしまったかのようだ (231)。ここに最後の切断、ないし断絶があるのだ。

皮肉なことに、この制度転換のきっかけは、“The Great Panty Raid” と呼ばれた、男子学生たちによる下着泥棒騒ぎが 20 周年を迎え、それにあわせてか、男子寮、女子寮の両方を占拠して、男子学生たちが学生としての権利を主張したことだった。真剣な大義名分を欠いた学生たちの愚行がワインズバーグの「公民権運動」の契機につながる一方で、戦争の被害について継承

する者はいなかった。マーカスはまさしく「忘れられた戦争」における「忘れられた兵士」だった。歴史を遡り、特異な存在として認識される日は訪れないのだ。

本稿では、マーカス・メスナーの身体性がいかに「切断」と「接続」的現象を伴っていくのかという点から *Indignation* の考察を進めた。この「切り離される」及び「つながれていく」という不可抗力的な二つのベクトルに注目することで、全く知らない土地で起こったマーカスの死、そして彼の死に方は孤立した現象ではないことが明らかになった。彼に疎外感があったかもしれないが、今まで論じてきたように彼の破滅とは決して独立・孤立した、単なる不条理なものではなかった。複数の「切断」という象徴的な現象を介して、オリピアや自身の父親など、複数の人物及び事象が皮肉にも接続していき、それらをため込んでいったマーカスの身体は引き裂かれ、露出されることになる。

そして、そこには生き延びることで考えられる、自分は“ordinary”か“extraordinary”か、自分はマジョリティだったのかマイノリティだったのか、というロスの過去作品に見出せるような問いももはや無効化される。国家レベルで展開する、文字通りの戦争の前に属性は抹消され、敵も味方も顔なき兵士と化し、損傷した誰なのかわからない肉体がただ戦場に残るのみなのだ。

そのような「切断の接続」の先にあるのは、冷戦の産物であり、多くの犠牲を伴った朝鮮戦争というアメリカの歴史がもはや鑑みられなくなり、忘却の彼方に葬り去られている、という不動の現実だった。この「切断」と「接続」という正反対の事象が、規模を大きくしながら—つまり人間関係といった事象から、一人の人間の戦死という事象につながるという流れを伴って—交互に展開し、最終的には「切断」で終わる、という構図は、先述したようにマーカスが「生者」と「死者」という二項を行き来しつつも、結末部分でマーカスは実際に戦死する、という構図と共振する点があると言える。

表題にもある *Indignation* は中国の義勇軍進行曲<sup>5</sup>における “Indignation

fills the hearts of all of our countrymen/Arise! Arise! Arise!” という箇所からの引用で、苦痛なチャペルアワーに耐えるため、マークスの頭の中ではこの曲が特に “indignation” という 4 つの音節から成る単語を強調されて流れ続ける (*Indignation* 82)。このような彼の憤りは今まで見てきたように、あらゆる方向において表出される。あらずじでも確認したように、父親の干渉、ルームメイトが部屋でかけるレコード、アルバイト先、などと怒りを様々な場面においてあらわにする彼の性格が歪んでいることを読み取ることができる一方で、実際のところ彼の周りの環境の歪みを逆照射するような構造が本作には潜んでいる (都甲 94)。こうしたキャンパスライフを巡る彼の感情の様々な発露が、本作の「憤り」を部分的に構成している。

しかし、その憤りは極めて多層的だった。彼は突然の疑似的な死を迎えることで、永遠の闇に閉じ込められたと錯覚しており、そこでも憤慨するほかない。その後、彼が自分は本当に死んでいないことすら分からないまま、実際の死を迎えてしまう。

そして彼がもう語れなくなった後、最後に登場する全知の語り手は、“Yes, if only this and if only that, we’d all be together and alive forever and everything would work out fine. If only his father, if only Flusser [his roommate], if only Elwyn [another roommate of his], if only Caudwell, if only Olivia——!” (229) から始まるパラグラフにおいて、その後も感嘆符を多用しながら、悲劇を回避できなかったマークス、そして回避させてくれなかった環境に対しての憤りを代弁する。そして上述したように、そのような憤りはマクロな歴史、すなわちワインズバーグ大学ないしアメリカ国家の歴史において記憶されていないのだ。つまり、歌詞の引用、マークスの生前の憤り、疑似的死における憤慨に加え、本人は知りえないにせよ、最後に考えうる “indignation” とはその状況そのものだろう。

#### 注

- 1 朝鮮戦争と小説・映画、という関係からすれば、原作 *Indignation* の同題の映画版

に関して、デイビッド・グーブラーは原作のプロットがいささかフラットになってしまったことを指摘する一方、オリヴィアの視点が加わることで、原作のタイトルに新たな意味が与えられるとも主張している。また、ニューヨーク・タイムズの批評家スティーブン・ホールデンは “But despite its faults, ‘Indignation’ is easily the best film made of a Roth novel, which is saying a lot” (n.pag.) と指摘するように、今まで数多くのロス原作映画が作られてきた中、成功例は少なかったのだが、本作に関してはある程度アダプテーションが功を奏したと言えるのだろう。

- 2 アルヴィンと語り手の関係性や、ポリオの象徴性については拙論を参照。
- 3 この指摘は、あくまでも物語設定上の必然についての指摘であり、必ずしもマイノリティの方が、社会的に不利な状況に追い込まれるという現実問題についてのものではない。
- 4 朝鮮戦争について考える上で、しばしば言及される点は、戦場での想像を絶する寒さだ。例えばポール・オースターは自身のエッセイにおいて、“... and never a word about the boots worn by the soldiers in Korea ... and again you were haunted by the image of blackened, amputated toes, tens of thousands of discarded stumps, and a mountain of digits severed from the feet of shivering, frostbitten soldiers” (57-8) と凍傷に対する恐れを描いている。オースターの文章からも、身体を激しく損傷し、どの国からの兵士なのか不明な人間の肉体がただそこにある、という状況が読み取れる。
- 5 ロスは、Acknowledgment において、本作中の3か所の引用先を明記している。それらは “The Chinese national anthem”、“Bertrand Russell’s lecture ‘Why I Am Not a Christian’”、“chapter 19 of *The Growth of the American Republic*”である。三つの引用から、おそらくアメリカにおける社会規範への反発から派生する、中華人民共和国という社会主義国家への共感、死後の世界の存在を信じず、宗教を拒む態度、そしてそういった思想信条の持ち主であれマークスはアメリカ人であるという不動の事実、という3点が連想でき、冷戦構造、宗教心の問題、アメリカという国家、という重要テーマが集約されていることが分かる。

## Works Cited

- Auster, Paul. *Report from the Interior*. Henry Holt, 2013.
- Cummings, Bruce. *The Korean War : A History*. Kindle ed., Modern Library, 2011.
- Duban, James. “‘That Butcher, Imagination’: Arthur Koestler and the Bisociated Narration of Philip Roth’s *Indignation*.” *Philip Roth Studies*, vol.8, no.2, 2012, pp.145-60.
- Gooblar, David. “‘there is some shit I will not eat’: Indignation in *Indignation* and its Film



- Adaptation." *Philip Roth Studies*, vol.13, no.2, 2017, pp.51-62.
- Holden, Stephen. "Review: 'Indignation' Offers a Precisely Rendered, and Repressive, 1950s America." *New York Times*. Jul. 29, 2016.  
<https://www.nytimes.com/2016/07/29/movies/indignation-review.html>
- Kaplan, Brett Ashley. *Jewish Anxiety and the Novels of Philip Roth*. Bloomsbury Academic, 2015.
- Kondo, Yuki. "The Broken 'Soldier' at a Camping Site: Battling against the Multi-layered Epidemic in Philip Roth's *Nemesis*." *Kansai American Literature*, vol.56. 2019, pp.5-16.
- Mckinley, Maggie. "Blood, Tradition, and the Distortion of Ritual in Philip Roth's *Indignation*." *Studies in American Jewish Literature*, vol.33, no.2, 2014, pp.186-201.
- Merritt, Jonathan. "The Remembered War: The Korean War in American Culture, 1953-1995". Alabama U, 2017. PhD Dissertation.  
[https://ir.ua.edu/bitstream/handle/123456789/3427/file\\_1.pdf?sequence=1&isAllowed=y](https://ir.ua.edu/bitstream/handle/123456789/3427/file_1.pdf?sequence=1&isAllowed=y)
- Morison, Samuel Eliot and Henry Steele Commager. *The Growth of the American Republic, Volume One*. Oxford UP, 1960.
- Mustich, James. "Philip Roth: *Indignation*." *Barnes & Noble Review*. 3 Nov. 2008.  
<https://www.barnesandnoble.com/review/philip-roth-indignation>.
- Roth, Philip. *American Pastoral*. Vintage, 1997.
- . *Exit Ghost*. Vintage, 2005.
- . *Goodbye, Columbus and Five Other Stories*. Vintage, 1959.
- . *The Human Stain*. Vintage, 2000.
- . *Indignation*. Vintage, 2008.
- . *Nemesis*. Vintage, 2010.
- . *Portnoy's Complaint*. Vintage, 1969.
- Russell, Bertrand. *Why I Am Not a Christian and Other Essays on Religion and Related Subjects*. Touchstone, 1967.
- Shipe, Matthew. "After the Fall: The Terror of History in Philip Roth's *Indignation*." *Philip Roth Studies*, vol.14. no.1, 2018. pp.1-24.
- Thomson, Rosemarie Garland. *Extraordinary Bodies: Figuring Physical Disability in American Culture and Literature*. Columbia UP, 1996.
- 都甲幸治『21世紀の世界文学 30冊を読む』2012年、新潮社。
- ハルバースタム、デイヴィッド著 山田耕介・山田侑平訳『ザ・コールデスト・ウィンター 朝鮮戦争』上巻 2012年、文春文庫。